



デカルトの「自然の教え」とは何か

- ストア派の本性概念との対比で

佐藤 真人
日本学術振興会・特別研究員PD

2018年10月7日
日本倫理学会 第69回大会(玉川大学)自由課題発表



ストア派のデカルトへの影響

- 『方法序説』の「暫定的道徳」、とりわけ第三格率が述べる克己と思考の統御をめざす思想
- ボヘミア王妃エリザベートに対し、セネカの『幸福な生について』を解説
- 学知の体系的な統一

ストア派のデカルトへの影響の領域は？

- 道徳や自由意志の問題
 - 至福や善、徳の考察
 - 「自然(本性)に従う」とは「事物の秩序に服する」ことであり、それこそが「知恵」である
- 自然を別の角度から見るとどうか？

デカルトの「自然」(「第六省察」)

- 一般的な自然とは神そのもの、または神が制定した被造物の相互秩序
 - 個別的な自然とは心身の結合体
- 「自然の教え」(または「自然の定め」)は「個別の自然」が感覚を通じて得る情報
- 「自然の教え」は、感覚と情念の情報以上のものを含まないのか？

「自然に従う」思想の起源

- φύσις : 動詞φύω〈成長する、増大する〉 → nascor → natura
- ヘラクレイトス: 事物を自然に従ってκατὰ φύσιν明らかにする
- 万物はロゴスに従ってκατὰ τὸν λόγον生成する
 - ロゴス = 宇宙の生成原理
 - 自然 = 本性／本質

ゼノン:「自然に従って」生きる

- 動物: 衝動または本能に従うこと
- 人間: 理性に従うこと
- 「自然は我々を導いて徳へ向かわせる」: 自然と調和して生きることが、徳／最高善
 - = 万物の秩序としてのロゴスに従うこと

ストア派とデカルトの共通点

バルザック(1597～1654)「ゼノンはデカルト氏の姿をしていた」

- 哲学は肥沃な畑で、倫理学はその果実、自然学は土壌ないしは果樹
- 立派な城壁に守られ、理性によって統治されている都市
- 知覚が困難な物体を、知覚が容易な物体と類比
- 善の観念は自然本性的に得られる
- 神を自然と同一視

学問の統一性

- 「デカルトの知は、ストア派の徳のように、もはや外部の自然の上に秩序づけられるのではなく、自らの内なる法則に従って決定される」
(É. Méhl [1999], p. 254).
- 『方法序説』副題: 「我々の本性をその最高度の完全性にまで高め得る普遍学の計画」
- デカルト: 「セネカとモンテーニュの真の弟子」(É. Gilson [1925], pp. 93-94).

自然研究の目的

- セネカ：宇宙を構成する物質を知る + 宇宙を創った神の考察
「それ以上大きなものは何も考えられないという偉大さが神に帰せられる」
- デカルト：「神よりも完全なものは考えられない」
- (アンセルムス：「神とは、それより大きなものが考えられないものである」)

デカルトの自然研究の目的

- 神の考察：自然学上の要請 = 「自然学の基礎」の必要
「永遠真理創造説」：数学を含む、すべての真理は神が創造

「神の作品をより大きいものと考えれば考えるほど、ますます神の能力の無限性に気づく」
「神は至高に善であり、決して欺かない」
- デカルトの哲学：「実践的な哲学」

自然と技術

- セネカ：「私たちの目標は、自然に即していきること」
→ 自然の成すロゴスを知り、それに従うため。自然を変えるためではない。
- ゼノン：完全な自然 = 理性 = 技術者
- デカルトの『情念論』：「道徳哲学ではなく、自然学者として語る」
→ 情念の「技術マニュアル」

「情念はその本性上、すべてよい」

- 自然 = 神の作った秩序 = 本来的に善
- 情念の理解と制御 = 「自然に従う」 = 自然を定めた神に従う
→ 「善い生き方は自然に決まる」（小泉義之[1996;2014], p. 181).
- 「自然に従う」だけで充分か？ → 自然を補い、変更を加える必要性

「個別の自然」の教えの誤り

- デカルト

病気やケガにより、健康体が知覚することや、健康体にとって「有益・有害」なものとは異なる

→ その場合、原因の究明と修正が必要

→ 医学 = 心身結合体の異常によって誤った自然の教えを正すための技術

- ストア派の技術： 内部世界のみ＝理性による情念の制御
自然は神とその技術の偉大さを思うために役立つ

デカルトの『屈折光学』

- 光線の屈折＝外部の自然

- 視覚の構造＝「個別の自然」

→ レンズと望遠鏡 = 二つの「自然」を統合し、制御・補正するもの

「自然は技術によってそこ(瞳の大きさを変える能力)に何かを付け加える余地を残しておいた」

→ 自然は受動的に研究するだけでなく、能動的に働きかけることが可能

→ 「自然」は技術の可能性についても教える

セネカとデカルト

- 「皆に知られすぎ、己自身に知られることなく死ぬ者に、死は重くのしかかる」（『テュエステス』401-403）

→ デカルトのモットー

↔ セネカの自然本性の思想：「きわめて曖昧」 + 受け身 + 内省的

「自然の主人にして所有者のように」

- 「人間の本性は時として欺くものであらざるを得ない」
- 「我々の本性の弱さを認めなければならない」

→ 研究 + 治療／補填／修正…

- 技術 = 以下3つの仕方で、総合的に自然に働きかける方法
 - 情念に対する道徳（個別の本性：心身結合体と自由意志）
 - 心身結合体に対する医学（個別の自然：身体）
 - 外部の自然に対する物理的な技術（一般的な自然）

→ 「自然(の主人)」に倣った「技術者」として自然に働きかける

デカルト流「自然に従う」とは？

- 多様な方法を通じた、自然との相互対話
 - 自然から新たな教えを受ける
 - 適切な回答をする
- = 自然の果実をもっとも良い方法で享受するための適切な(=自然を模倣した)技術と、それを支える道徳を常に探して実践する、終わりの無い試み

ご清聴ありがとうございました。

佐藤 真人

哲学博士(パリ・ソルボンヌ(パリ第4)大学)
専門: デカルトを始めとする西洋近世哲学

日本学術振興会・特別研究員PD (所属先: 東京大学大学院)
e-mail: ms4385@gmail.com